

育苗期におけるイチゴ炭疽病の化学農薬による防除体系

[要約]

育苗期に発生するイチゴ炭疽病に対し、薬剤の効果などを考慮した防除体系では、7日間隔の散布で効果が高く、「いばらキッス」（仮称）においても「とちおとめ」と同等の防除効果が得られる。また、機能性展着剤の加用により、効果の向上が認められる。

茨城県農業総合センター園芸研究所

成果
区分

技術情報

1. 背景・ねらい

近年、イチゴ苗の生産現場において炭疽病が多発生して問題となっている。そこで、本病に対する、化学農薬による効果的な防除法を確立する。また本県で育成された「いばらキッス」について、本病に対する効果的な防除法を検討する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 育苗期に発生するイチゴ炭疽病に対し、効果の高い薬剤を7日間隔で散布する防除体系（図1）は、14日間隔または7～10日間隔で散布する防除体系（図1）よりも効果が高い（図2）。
- 2) 「いばらキッス」は「とちおとめ」と比較して、炭疽病の発病度が高く推移することから、「とちおとめ」より炭疽病にやや弱いと考えられる（図3）。
- 3) 効果の高い薬剤を7日間隔で散布する防除体系は、「いばらキッス」において「とちおとめ」の場合と同等に高い防除効果が得られる（図3）。
- 4) プロピネブ水和剤（商品名；アントラコール顆粒水和剤）およびマンゼブ水和剤（商品名；ジマンダイセン水和剤）に機能性展着剤のポリナフチルメタンスルホン酸ジアルキルジメチルアンモニウム+ポリオキシエチレン脂肪酸エステル（商品名；ニーズ）を加用すると防除効果が高まり、農薬の散布回数を削減できる可能性がある（図2）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本試験では、展着剤の加用による薬害は生じなかったが、加用する薬剤の種類や環境条件によっては、薬害が生じる可能性があるため注意する。
- 2) 薬剤の効果持続期間をもとに作成した体系防除Ⅱ区（7-10日間隔）の効果がⅢ区（14日間隔）と同程度に低かったのは、夏季の高温による多灌水により、薬剤の効果または残効が低下したためと考えられる。
- 3) 本防除体系は、炭疽病防除のみを目的としているため、この他にうどんこ病やハダニ類等を対象とした薬剤を選択する必要がある。
- 4) 県内においてアゾキシストロビン剤に対する耐性菌が発生しているため（平成20年度主要成果）、炭疽病に対する防除効果の低下が見られる園では使用しない。
- 5) 県内において、ベノミル剤に対する耐性菌が高い割合で発生しているため、炭疽病防除に本剤は使用しない。
- 6) 育苗床に病原菌を持ち込まないよう、親株床での薬剤防除も適宜実施する。
- 7) 試験に使用した農薬は、平成23年1月19日現在、農薬登録のある薬剤である。

